

## 「自分でつくる」を、はじめてみませんか

ツバキラボ 和田賢治さん



岐阜市北部樺洞に7月、会員制の木工シェア工房「ツバキラボ」がオープンしました。約500平方メートルの作業場には、20台以上の機械や工具があり、これらが自由に使えます。「ひとりでも多くの方が、仕事と趣味ものづくり」とのバランスを取りながら、日頃の暮らしに向かっていけるように...」

「木のものづくりで暮らしを豊かに。ここはそんな想いから生まれた、今話題の空間です。」

つくる、とは...

オーナーは木匠 和田賢治さん、36歳。大学卒業後、大手自動車メーカーに就職し、いわゆる「エリート」社員として海外出張も頻繁な物流関係の部署に配属されました。

忙しい毎日を送る中、ある時いつものように港に並べられた何千台という車が、タンカーの中に「シューツ」と消えるように積まれていく姿を見ながら、ふと大量生産、大量消費の世の中に疑問を持ちました。

「これも、今の日本。でも、これからも、これだけでいい世の中になるのかな...」

ちょうどその頃結婚し、新生活を始めるために量販店で家具を購入します。すると、偶然なのかしばらくすると扉の動きが鈍くな

も興味もあつたわけではありませんでした。

そこで「木工」を基礎から学ぼうと、飛騨高山の職人養成塾へ。週6日、朝から晩までを2年間、ひたすら木と向かい続けました。

そして、更に自らの可能性を探ろうと、岐阜県立森林文化アカデミーの教員として「木」を教える道を選びました。ここで20代から60代と年齢も目的も違う学生たちと接した時間は、後の自分にとって大きな糧となりました。

「人にも木にも『個性』があるのです。椅子はこの木でこうつくる、机はこうだといった固定観念で同じものをつくるのであれば、自分が思い悩んだ大量生産とそう大差はないのです」

柔軟ということの大切さを学んだと、当時を振り返ります。

また岐阜県立森林文化アカデミー、美濃加茂市などによる取り組み「アベマキ学校机プロジェクト」では、美濃加茂市北部の里山に群生しているアベマキを使い、天板にしていくことを提案しました。

「5、6年生が伐採から天板になるまでを確認し、自分たちが使っていた天板を取り外して新しいアベマキの天板を取り付けて新1年生に机を贈呈するのです。その机を、新1年生は『すごい気持ちいい!』と手で擦るんですよ」

この木と地域の人々を結びつける取り組みは、2015年第一回ウッドデザイン賞優秀賞(林野庁長官賞)を受賞。大きな自信へとつながりました。

「つくる」という選択を加えることが地域のつながりも「つくる」

2017年3月、5年間務めた岐阜県立森林文化アカデミーを退職。満を持して合同会社樺洞ものづくり研究所を設立。同時に、木のものづくりをより多くの人が楽しめるようにと、誰もが本格木工ができる会員制木工シェア工房「ツバキラボ」を立ち上げました。

つたり、引き出しがうまく入らなくなったり...。

そんなとき、ふと思いついたのが仕事を通して抱きはじめていた「疑問」でした。

いつしか大量につくられる「モノ」が、自分とシンクロするような感覚になり、自分の人生すら安っぽく思えてしまうようになりました。

「誰がどうつくったものか、それを誰がどう使うのか、そんなことを考えることも必要なのではないかな...」

一度きりの人生、そこに意味をみつけてみたい。

そう思い始めたなら、もう後には戻れなくなってしまいました。

改めて家の中を見回すと、大量生産のものに埋もれていることに気が付きました。

そのなかで、ただひとつ輝いて見えたのが父親から譲り受けた古い学習机でした。それは、丁寧につくられた木工職人の手製のものでした。

「こういうものをつくっていきたい!」

直ぐに退職を決めました。

「木」を学ぶ、「木」から学ぶ

しかし和田さんは、それまで特に家具やDIYに知識

「私たちは日々、ものを買って暮らしています。そしてその買ったものがダメになったら捨ててまた新しいものを買います。」

しかし、そこには「買う」という選択肢しかありません。ところがそこに、「自分でつくる」という選択肢が加われば、材料を調達してつくり、ダメになったらそれを直してまた使うでしょう」

そういう「選択肢」がある中で生活していくことが大切だと、和田さんは語ります。

さらに、東日本大震災をきっかけに暮らしに対する価値観も大きく変わりました。

「ものをつくっている人はどこにでもいて、そこで暮らしている人もいる。ただその2つが繋がっていないのです。そこで、地元の材料を使って、それが接点になって、一緒にいろいろな活動を始めていけば、地域としての繋がりが、人と人の結束が強くなると思うんです。そうすると声を掛け合い、その輪が広がっていくのではないのでしょうか。いつかここが、そんな『交流の場』となればと考えています」

地域との共生。

和田さんが軸とするテーマのひとつです。

今、ここには

木に触れ、

何時間もひとつのことに向かう

「つくる」という作業に、癒しを求め、年齢を問わず、多くの人が集まります。

一度、訪ねてみてください。

居心地のいい

「心のリフレッシュ」空間です。

